

分布：全国

# ゲンゲ (マメ科)

学名: *Astragalus sinicus*  
アストラガルス シニクス

## 蓮華

別名：レンゲ、レンゲソウ、テンマリソウ、ゲゲバナ、ミコシソウ、紫雲英、翹揺

### 主な生育場所

耕作前の水田、休耕田、田畑の畦畔、法面草地、河川敷など。湿った場所を好むが、長時間冠水するような湿地には生えない。また日陰でも生育できるが、よく日の当たる場所で大きな群落となる。

### 特徴

下部は地面を這い、上部は斜上し10~25cmの高さとなる越年草。茎の断面は四角形で柔らかく、有毛で根元からよく分枝する。葉は互生し、9~11枚の小葉からなる奇数羽状複葉で小葉は倒卵形で円頭あるいは凹頭。10~20cmの花柄の先に紅紫色の蝶形花を輪状につける。果実は黒熟し、長さ2~3cm。種子は勾玉形で茶系色。



名前の由来：ゲンゲとは漢名の「翹揺」の音読みに由来する。また、春先に伸ばした花茎の先につける7~10個の輪生状の花の様子を仏様が乗る「蓮華」(ハスの花)の座に見立てて、レンゲ。

### <農業との関係>

古来から緑肥や飼料として各地で栽培されてきた。とくに化学肥料が登場するまでは、窒素固定能が高い根粒菌をよくつけ、毎年自生するゲンゲは水稲休閑中に土壌を肥やすことのできる優秀な緑肥であり、10aあたり5kg以上の窒素を供給することができた。しかし、化学肥料の普及や田植えの早期化による生育盛期や結実期前の耕うんにより、急速に春の水田から姿を消していった。



水田に緑肥として栽培されるゲンゲの開花期

### <生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 春の水田で似たような植物は見当たらない。同じ豆科のヤハズエンドウ(カラスノエンドウ)も羽状複葉だが、小葉の幅は狭く、小葉数もゲンゲより多く、偶数枚となる。また蝶形花を同じように頭状につけるシロツメクサの花の色は白い。

### <一言うちく>

ゲンゲは、日本在来の草花ではなく、奈良時代頃に中国から緑肥や飼料用に導入された帰化植物です。その後、春の水田の風物詩となるほど日本の風土に馴染み、和歌や俳句などにも多く詠われています。しかし、緑肥や飼料用のゲンゲ種子の生産ははまだ中国で行われることも多いのです。



花茎の先に蝶形花7-10個を輪生

### <人との関わり合い>

緑肥や飼料用に栽培されるほか、ミツバチの良質な蜂蜜を提供する蜜源植物として養蜂家にもよく利用されている。また、水稲不耕起栽培と組み合わせて、水稲移植前後の雑草抑制にも利用されることも。各地の休耕田等に鑑賞用にも栽培される。若菜や花は食用となり、花付きの茎を姿揚げにしたり、花と蕾を酢を入れた熱湯にくぐらせ三杯酢で食べたりする。開花期に採取し天日乾燥したものは、咳やのどの痛みなどに効くとされ、民間ではうがい薬等にも使われることがある。

### <俳句や短歌への登場>

【季語:春】手に取るな やはり野に置け 蓮華草 (滝野 瓢水) 胸までの紫雲英仔犬は迷ひゆく(中村 草田男)  
野道行けばげんげんの束すてゝある(正岡 子規) げんげんを打ち起したる瘦田かな(正岡 子規)  
春の田はまだたがやさずれんげさうあぜのさかひもあらず咲きたり (三ヶ島 葎子)  
赭土(あかつち)の山の日かげ田にげんげんの花咲く見れば春たけにけり (島木 赤彦)